

## 仁川地滑り資料館

甲山の東斜面、仁川溪谷が麓の仁川の住宅地に流れ出たところに、シバザクラの花に包まれた「仁川百合野町地すべり資料館」が建っています。

1995年1月17日、あの阪神大震災の日、ここで幅約100m、長さ約100m、深さ15m、移動土塊約10万m<sup>3</sup>という大規模な地すべりが発生、斜面東側に位置する仁川百合野町と仁川6丁目の家屋13戸が押しつぶされ、34名の尊い命が失われました。



僕はこの資料館を訪れるのは今回が初めてです。阪神大震災では、倒壊した阪神高速道路の映像や、長田区などで発生した大火災の映像が強く印象づけられて、このことはあまり知られていないのではないかと……。あの日にここで何があったのか、それを知るためにいろいろ調べるうちに、神戸新聞が震災から10年後の2004年、「埋もれた記憶 西宮、仁川の地すべり」と題して特集した記事をインターネットで見つけました。これはその取材記事を抜粋したものです。（名前は仮名で年齢は震災時の年齢です）

### あの日……「埋もれた記憶 西宮、仁川の地すべり」から

林佳代さん（23）は闇の奥に地響きを聞いた。壁が音を立てて倒れた。ベッドがジェットコースターのように流された。布団を両手できつくつかんだ。

やっと止まったとき、ベッドの間で身動きできなかった。「お母さん」と、叫んだが、かぶった布団に声がこもった。暫くして男の人の声が聞こえた。「だれか、おるん」。1時間後、砂山となった二軒隣の家の上で救出された。

野田秀夫（40）さんは、夜明け前のトイレで地震に遭遇した。揺れが収まって数秒後、地鳴りが聞こえた。妻の恵子さん（38）と小学生だった二女（12）がいる寝室へ駆け戻り、二人を抱えようとした。すさまじいごう音。死を覚悟した。気がつくやうに、目の前に天井があった。

駆けつけた近所の若い兄弟が瓦をめくってくれ、秀夫さんは脱出できた。平屋だったのが幸いした。懐中電灯の光の輪に映る風景に絶句した。山すそから官舎までの間の家並みが消えて、砂山と化していた。秀夫さんは物置にあった登山靴を履いて屋根をけ破り、家族三人を次々引き出した。

パジャマ一枚の恵子さんと娘二人に近所の人が服をくれた。まだ薄暗かったとき、がれきから煙が昇るのに気づき、恵子さんは叫んだ。

「火が出ている！」

中村敬夫さん（39）は気がつくのがれきに埋もれ、顔だけ外に出ていた。家の屋根は吹き飛んでいた。動けなかった。足元の下で、何かがおぼろげに。中村さんの背筋に悪寒が走った。「ガスが漏れている。火事になる...」

近所の人に来てくれたが、右足首に食い込んだ柱と板はびくともしない。

一時間後、煙が立ちこめた。土砂の下でがれきがくすぶり出した。はだしの足の裏が熱くなった。すぐ近くで、爆発音とともに火柱が上がった。

水道は断水、住民がバケツで風呂の残り湯を使い必死に消化を始めた。土砂を掘ると、炎が噴き上げ、消火器では手に負えなくなった。

「足は、もうどうなってもいい」

近所の男性（24）は、敬夫さんの右足首を押さえている約二十センチ角の長い柱を見て「無理だ」と思った。もちろん、言葉にはできなかった。

男性が角材をすき間に入れて押しても、微動だにしない。誰かが近くの工事現場から長いロープが持ち込み、角材に結わえた。

「声をかけたら、引いてくれ」。引っ張ってもらった途端、角材は折れた。

そのとき、男性は1メートルの鉄のバールを手渡された。ロープを結わえ、また引いてもらった。声に合わせて敬夫さんを引き出す役もいた。足が、抜けた。拍手と歓声が起きた。敬夫さんは、助けてくれた男性に抱えられて土砂の山の上に立ち、初めて状況が分かった。両親と姉の死を覚悟した。

救出された林佳代さんのけがは、すり傷程度だった。はだしのまま道端の階段に座った。コートを借りても、体が震えていた。

土砂に押しつぶされた自宅が、地中からの激しい火勢にさらされていた。「お父さんとお母さんと妹が中にいるんです」。近所の人、そう何度も繰り返した佳代さんの姿を忘れられずにいる。

家族がいつ発見されたか、日時を正確には覚えていない。圧迫死と判断された両親に対し、妹の佳奈さんは焼死だった。

震災の2年後、佳代さんの家があった場所に地滑り記念館が建った。

失って改めて家族の大切さを知った。その後佳代さんは結婚し、子供にも恵まれた。「家族はいてくれるだけで幸せ」。あの時、一瞬で三人の家族を失った佳代さんは、今新しい家族を得て、毎日こう思いながら暮らしている。

右足をはさまれていた中村敬夫さんは救出され、住民が病院へ運んだ。皮のむけたかかところが赤黒く変色し、足の裏をやけどしていたが、生きていた。

姉の泰江さん（42）は地震の翌日、父政廣さん（80）は3日後、母つね子さん



(74)は10日後に遺体となって、発見された。

3月14日になって、阪神水道企業団の職員が初めて訪ねてきた。すでに地滑りの人為的要因が報道されていた。企業団が谷を埋めた盛り土が、強い揺れで崩落し、地滑りを起こしたというのが、報道された内容だ。

地滑りの原因を、職員は「調査中」と繰り返した。補償について問うと、「一切考えていません」という返事だった。地滑りさえなければ、家は倒れず、人が死ぬことはなかったはず。死者のためにも原因をはっきりさせたい。一人生き残った中村さんは足の傷が治って、埋もれてしまった元の家風景を見た時、そう思わずにはいられなかった。

### なぜ地滑りは発生したか

阪神水道企業団は、当初「法的に問題はなかった」と原因究明に消極的だった。

「地滑り」は土石流や崖崩れと違って比較的ゆっくり移動面が動き出すといわれ、仁川の場合のように、一瞬に何軒もの家屋を押し流すような被害は、大地震の災害が引き起こしたもので、不可抗力であったというのが企業団の主張だった。



しかしこれに対して、「盛り土と元の地表との境界付近に水がたまっていたのではないか」という疑念が寄せられ、京都大学防災研究所を中心にして、現地の土を用い、地滑り再現実験が繰り返された結果、マサ(穀類の粉に水を混ぜたもの)のようにもろい地盤が水を含むと、地震で液状化が起こり、滑り出すと分かった。

「滑り面液状化」。甲山浄水場の造成時の盛り土の部分の地下10m付近には粘土層があり、そこは多量の地下水が含まれていた。その地下水を多量に含む粘土層の表面部分が地震の激しい揺れで、液状化し滑り始め、かつ、そこに多く植えられていたニセアカシアは根が浅いため、土をしっかりとつかむことができず、一気に大量の土砂が滑り落ちることとなったのだ。

### そして、今.....

資料館では、地盤や地下水位の変動などの地滑りの予兆を24時間体制で監視、コンクリート擁壁で覆われた斜面は、激震の記憶をとどめる場所になっています。

しかし、あれから17年、約2割の住民が入替わった仁川の町では「あの地滑りさえ知らない人」も増えているのも事実です。

資料館は地元のシルバーの方が交代で管理しておられますが、「あの悲しい出来事」を出来るだけ沢山のの人に知ってもらいたい、そう思って資料館を訪れた人に説明しているそうです。(資料、インターネット、資料館のパンフレット)